

# 『下天は夢か』の『武功夜話』利用

菊池 真一

## 一 『下天は夢か』の引用文献

津本陽の『下天は夢か』は、一九八六(昭和六十二)年十二月一日(月曜日)から一九八九(平成元)年七月三十日(日曜日)まで、「日本経済新聞」に連載され、一九八九(平成元)年六月から八月にかけて単行本化された(四冊本)。

歴史小説が「資料と格闘」するものである以上、「下天は夢か」がいかなる資料を参照し、駆使しているかは、興味の持たれる所である。まず、本文中に書名を明記された引用文献を列挙してみる。単行本各冊別。数字は出現度数。

### 第一冊

南窓庵記

### 第二冊

御湯殿上日記・信長公記・中島文書・松平記・寛政重修諸家譜・細川家記・言繼卿記(9)・重編応仁記・老人雑話(3)・後奈良院宸記・イエズス会日本通信・日本西教史・備前老人物語・拾塵記・帖外御文・天文日記・イエズス会年報

### 第三冊

言繼卿記(4)・朝倉家記・武徳編年集成(2)・日吉兵乱火災之記・信長公記(8)・浜松御在城記(2)・甲陽軍鑑(2)・日本西教史・重編応仁記・兼見卿記(2)・御湯殿上日記(2)・多聞院日記・年代記抄節(2)・朝

倉始末記・古今消息集・三河物語(2)・菅沼家譜

(2)・頭如上人御書札案留・治世元記・朝倉記・山上宗二記

#### 第四冊

奈良東大寺金堂日記・甲陽軍鑑(3)・三州長篠軍記・続見記・葉隠聞書・信長公記(19)・武徳編年集成・長篠日記・松平記・礼記・六韜・陰徳太平記(2)・言繼御記(3)・孝子経・仮名目録・備前老人物語・多聞院日記(2)・安土宗論諺註・安土問答実録(2)・己行記(2)・徳川実紀・三河物語(3)・御湯殿上の日記・切支丹宗門来朝実記・土佐物語・当代記(2)・宗及他会記・甲乱記・日本外史・日本史(フロイス)(2)・川角太閤記・明智軍記(3)・兼見御記・林鐘談・天正十年夏記・仙茶集・寂光寺誌

『下天は夢か』第一冊は、天文十八年(一五四九)信長十六歳から永禄六年(一五六三)信長三十歳まで。第二冊は永禄七年(一五六四)信長三十一歳から永禄十三年(一五七〇)信長三十七歳まで。第三冊は同年から天正二年(一五七四)信長四十一歳まで。第四冊は同年から天正十年(一五八二)信長四十九歳までである。年を追うごとに史料が増大しているさまは、

引用書目からもうかがうことができる。

ここで注目されるのは、第一冊に唯一挙げられた『南窓庵記』である。『下天は夢か』第一冊五十五ページから五十六ページにかけて、蜂須賀小六の説明の箇所には、次のようにある。

彼らの根城は河内と呼ばれる大河七流の中洲であるため、攻めるに難く、守るにやすい地形で、近づく敵もなかった。蘆荻ざわめき竹林繁茂する広大な中洲は涯てをも見定めがたく、はじめておとずれる者が、川並衆の砦を探しあてるのは、至難の業であった。

『南窓庵記』に、木曾川筋和田村の新左という者の嘆きを記載している。

「久しく戦乱の明け暮れ、ために吉兆の鶴鳥降り来らずば寂しきことに候。これは小六殿の種ヶ島のためなりと思案顔なり。鶴天に舞わざるは、この先めてたからず」木曾川は春秋の洪水の時期になると、七流は狂つて十余流となった。

木曾川がひとたび氾濫すれば、田畑に砂が入り耕作は不能となる。そのため、川岸一帯には丈余の青草が海のようにねりひろがり、牛馬放牧の適地となっていた。

古びた草屋の集落は三十戸と並ぶところはすくなく、十

戸、五戸と散在しているのみである。

道はあつて無いようなもので、川沿いの民は幾百艘とも知れない持ち舟をわが足として、大河の上り下りに櫓楫をあやつる。

舟によつて交易をおこなうのは、遠く承久の昔より川並衆の生業であつた。川並衆を統べる頭領には、草の井長兵衛という者がいたが、蜂須賀小六が頭角をあらわしてのちは、彼の下風についている。

『南窓庵記』という書物が現在残っているわけではない。これは『武功夜話』<sup>(注2)</sup>が拠つた資料の一である。『武功夜話』巻二の第十六「尾州河内川並衆蜂須賀党の覚え」の第三には、次のようにある。

古来より河内というは大河筋七流の内なり。この地まこと節所、葦蓬茫茫七流追つて竹林繁茂、際限り相なし、行方見定め難く七流の間古家数戸三町離れて炊煙粗なり。前代より替らずの風景に候。記すところ、和田村の新左と申す者の語り相見えたり。

南窓庵記に曰く。久しく戦乱の明暮、為に吉兆の鶴鳥降り来らずは寂しき事に候。これは小六殿の種ヶ島のためなりと思案顔なり。鶴天空に舞わざるは、この先目出度からず、

南窓庵に相記す。

天文・弘治は瑞鳥鶴も舞わず。和田村新左のなげき、小六をうらむは可笑しき事。天文・弘治は美濃の境目は人馬の出入り甚しと記すところなり。古家三十、戸立ち稀なり、十戸、五戸と散在、馬飼い伯業の渡世人太多多し。一度長雨あれば高水田畑に砂を入れ、作毛を断つなり。馬飼いの好地、青草丈をなし、これをもつて足るなり。七流狂つて十有余流となり、上の郡より下の郡に及び、道あつて無し自然、舟をあつかう者舟を頼みて富を為す。持ち舟数百艘、大河の上り下り櫓楫を操るに妙なり。先祖伝来遠く承久の昔より生業と成す。草の井長兵衛なる者あり。川方衆の長なり。川筋大山計殿殿領知すといえども、蜂須賀党掌握す。津本陽が何故『武功夜話』とせず、『南窓庵記』としたのかは不明だが、『南窓庵記』の部分はほとんどそのまま、その他の部分も『武功夜話』をかなり利用していることが了解されるであらう。

『下天は夢か』が『武功夜話』を利用してゐる箇所は外にも多い。ただ先の例以外は、『武功夜話』とも『南窓庵記』とも断つていない。これは、遠藤周作が<sup>(注3)</sup>『反逆』において、まず最近、名古屋市外の前野家という旧家の土蔵からあまたの

古文書が出た。(上巻二十ページ)

と紹介して引用し、「前野家文書」として上巻で六度、「武功夜話」として下巻で九度、引用・言及しているのとは好対照と言えよう。

もとより、小説家はその依拠資料を明言する必要はない。

『下天は夢か』が、『武功夜話』に多くを負うていることを論証するのが本稿の目的である。

## 二 吉野(きつ)の

『下天は夢か』を読み始めると、新鮮な感動に打たれる。その一つは、従来の信長を描いた小説が、妻妾としては濃姫を描くに過ぎなかったのに対して、吉野(きつ)という女性を大きく取り上げ、濡れ場を度々描いている点である。「資料と資料の間をフィクションでつなぐ」<sup>(注4)</sup>のは「歴史小説家の特権」<sup>(注5)</sup>であるが、吉野は作者の創造になる人物ではない。吉野を描くに際しては、『武功夜話』が大いに参考になったと思われる。「武功夜話」における吉野の記事は次の通りである。(巻三の部分  
は省略)

巻一の七「信長公の室、生駒久昌庵の事」の第一

因州様、親父様八右衛門尉殿(生駒家長)共に、祖父孫九郎尉(小坂雄吉)諸陣の覚え出入りの次第等御物語、なお織田上総介信長公、郡生駒屋敷へ罷り候一部四十(始終)話、雲球殿、これは八右衛門尉の事。弘治・永祿の昔語り等、因州様より承り候事も、信長公御内室、初め吉野(きつ)の女後の久昌庵の事、色々諸伝申し語りあり。世上詳しくは伝わらぬ事、すなわち御三子は何れも生駒屋敷において御生誕遊ばされ候事。嫡子奇妙様、御次男於茶筌様、御三女於徳様と相続き御誕生のいきさつ等聞かされ候。な  
おもつて往昔の生駒屋敷繁昌の御目出度き様子の次第、諸記録等も拝見に及び、信長公御在世の逐一の次第見え申し無量感じ入り申し候。しからは弘治の初め、信長公未だ上総介様と呼ばり候、足繁く清須より御近習衆十有余人御伴仕り、郡生駒雲球(家長)屋敷へ御遊行。そのつど、大伯父将右衛門尉(前野長康)も御伴内に加り候由に候。吉野様男子お誕生遊ばされ候。この時、弘治元年(一五五五年)正月、一陽来雲球殿扶養の牢人衆、親類縁者の家人、召使いの下男下女、さては若党小者に至るまで、無礼無構の御触に付、馬場前のたまりに夜の更け行くを打ち忘れ、乱舞の狂態、さても目出度き哉と、信長様おどり出でられ、

果ては明け方と相成り候も歌いおどりの子細。

卷一の二十「吉法師様という信長公と成る事」の第一備後様（織田信秀）の御嫡子吉法師、上総介信長となる。

濃・三の堺、いまだ治まらぬ間、尾州津島の住人、堀田道空と老職平手三位（政秀）、西美濃三家衆と共に相謀り、斎藤、織田両家の御縁組の取り持ちあり。尾・濃の間を足繁く往来、ここに御目出度く成就候なり、備後様生前の御遺言あり、大人衆相謀り両三年相持ち御葬儀を取り行われ候。時天文辛亥（二十年、一五五一年）三月日の事。

ここに某ども党中の進退むつかしき儀、子細南窓庵記に記すところ。すなわち上総介信長様、美濃斎藤道三入道の御息女、（この人、胡蝶というなり）御縁組以前に、郡邑生駒藏人の女吉野女、上総介様の御手付きあり。この生駒の後家殿、土田弥平治討死候いてより、雲球（生駒家長）屋敷に罷りあり候ところ、上総介様（信長）、雲球屋敷へ御遊行、目を懸けなされ殊のほか御執心の揚句、上総介様の御たねを宿し罷り候なり。美濃との御縁組は、この一件秘事と成され候次第に候なり。しからば、雲球一門中ともに相謀り世上の謗りを慮り、丹羽郡井上庄の井の上屋敷へうつし隠し置き候なり、すなわち御嫡子奇妙様（織田信忠）、

茶筌様（織田信雄）、この地において御生誕遊ばされ候。

卷二の一「織田上総介信長様、尾州岩倉御城御抱の事」の第一

ここに尾張国清須の御領主、織田上総介様（信長）いまだ尾州下の郡那古野なる御城罷り候の時、先君備後様（織田信秀）の御世より、美濃斎藤氏は仇敵となされ、取り合い出入り飽きる事相無く候なり。しかるところ、今度津島、これは海東郡の住人、道空居士（堀田）の和談の仲立ちあり。ここに目出度く道三入道（斎藤利政）の息女、帰蝶と上総介様の縁組み相調い候。御興入れは、弘治乙卯年（元年、一五五五年）吉日の事。上の郡の者御冥加にあずかり候。絶えて久敷、鶴舞い下り目出度く寿ぎ候なり。なお先殿亡き後、美濃の道三入道腹黒き御仁に候ゆえ、これをもつて一先ずは落着候も、神仏ならでは先々の事はかり難く候よと語らい候なり。川筋衆放心の様体に候。されば、御先代の備後様の御世より、尾州郡村生駒八右衛門（家長）の家は親類に候。上総介様、備後様の跡を襲いなされ候いてより、上の郡しばしば御遊行あり。殊に生駒屋敷の弥平次の後家殿へ忍草足留なされ候なり。弥平次の後家殿は吉野（きつ）女というなり。すでに吉野女御懐妊、この時

に及び美濃より御興入れ、某どもは頭を傾け種々談じ合ひ候も、向後六ツケ敷儀等これあり候。

巻二の一「織田上総介信長様、尾州岩倉御城御抱の事」の第二

尾州郡郷生駒八右衛門の妹は、初め美濃國可見郡の土田弥平次に嫁すなり。吉野という。姉は須古といつてこの女子は、前野村の森甚之丞（正成）の室なり。吉野女は後に御三子の御生母、久庵様の事。姉女須古は中江殿というなり。これは、岩倉落去の後、勢州中江という所を下し給うなり。甚之丞中江二千貫文所領、甚之丞の長子は太郎という改め久三郎、森勘解由（雄成）の事。

### 三 川狩り

『下天は夢か』で印象的な叙述のもう一つは、川狩りの描写である。特に第一冊二一九ページから二三三ページまで、回想を含んだ長い記述は、強烈な印象を与える。他にも第一冊三三〇ページに川狩りがあるが、これらはいずれも『武功夜話』によつたものである。

巻二の二十五「蜂須賀党三州へ罷り出で候事」の第五

御滞在の明の日は、例の如く川役人村瀬平九郎を御召し寄せ、東出口古川の魚取りに御精を出され候。川を瀬切り水を替取り、鮒、鮫のつかみ取りに興じなされ、御伴衆市橋伝左衛門、佐脇藤八（良之）御馬の御口取り、木藤吉（羽柴秀吉）は尻をはしおり、寒気ものとも致さず水桶を抱えて、泥を浴びて様なし。信長様は河中に双手をつき巧なる事言様なし。古川の鮒格別の風味と御賞賚、至極満悦に候なり。右古川筋の川役、村瀬平九郎後日物語り聞かされ候。

巻二の二十七「前野氏先祖の事」の第三

信長様、近頃郡の生駒屋敷へ足繁く御通ひあり、云々。すなわち、まこと平常の粧にて主従五、六人の御遊行。親類の小折村の村瀬亀、同佐門太を相変らず御召し寄せ、川狩に興じなされ駿州今川の事意に介さず川干に御満悦なり。親亀齋（小坂雄善）未だ十歳に満たず、河内の又五郎殿（前野忠勝）すでに隠居なされ候。宗兵衛様（坪内為定）は、高の島に罷り候ゆえ、折節の音信も相無き次第、平穩に日暮し候由語り申し候。

券二の三十八「深秋大河辺り大曲測、木下藤吉郎殿川狩遊行の事」の第一

大河七流の者、古来より川底へ深く潜り、鯉、鮒、鮫三年

四年生成いたし、三尺、四尺は稀成らず。鯉、鮫手練の早業にて刺し止め、亦是船を漕出し船底を叩き、小魚を浅瀬に追いあげ、網を張りて捕獲する事、まこと妙を得るなり。草井長兵衛、五郎八、小船あやつり松川瀬を下り、圪土手へ着岸、木藤殿(羽柴秀吉)案内、蜂小六(蜂須賀正勝)、前将(前野長康)、宗兵衛(坪内爲定)、喜太郎(坪内利定)同船、五郎八、長兵衛掛声諸共松倉一氣に漕ぎ下り、大曲り大澳へ。これに続き川船五艘川筋衆乗り込み、陸路を郎党駆け走り、土手堤の上なる見張り良き処、種ヶ島相構え警固取り固め候なり。水の上秋風まことに心地良く、木藤殿遙か木の下の城、首を返し乾方稲葉の山を、小手をかざして御覽成され、小六殿、大河はもはや我等の手の内なり。本日川狩にて要用了、清須焔館の上この事逐一大胆那樣へ言上いたし、他日御案内申す程に心易き者どもなり、と至極満足の様体に候。蜂須賀小六殿、前野将右答えて申しけるは、是非とも本日の獲物を宮箆になされ、且那樣へ進上あつて大川の鯉、鮫、鮫を御賞美ある様、貴殿より言上候え。しからば、川筋の者共、枝川筋の者、この先川狩に余念相無く、いらざる御疑心も無用となされ、我等此如日あがりて日暮れるまで大河上下に起臥候なり。これ用意

の酒運び大いに饗応候由に候なり。

#### 四 剽氣踊り

永祿三年、今川義元上洛の噂を聞き、信長は不安を吹き払うかのように踊りに興じた。第一冊二四六ページから二五一ページにかけての様子も、『武功夜話』によるものである。

卷二の二十九、郡村生駒屋敷において、前野将右衛門、蜂須賀小六、信長様拜謁の子細大略の事」

郡村生駒八右衛門屋敷、前将右(前野長康)、蜂小六(蜂須賀正勝)の兩名、信長様へ拜謁の時、前野喜左衛門(義康)同道一左右申し語り候事。

喜左衛門殿は、前野屋敷留守居候ゆえ、前後の子細分からず候。為にこの危急の折柄、如何におどり好事の信長様の事、心中はかり難く郡村へ出向き候。小六殿、将右衛門殿扣え候も、これらの者に頓着なく深更までおどりに御興じなされ別条これなく候。取り付くしまも相無きところ、八右衛門殿只今蜂須賀小六、前野将右兩人の者、馬場先まで扣え居り候、何卒三州の様子御尋ねあるよう、取り成し候由。しかるところ信長様、おどりの御手を休めず、不敵の

者ども推参候哉、今宵は無礼譁なれば、弁慶なるとも、判官なれども罷り候え、罷り候えと申されける。同道の喜左衛門話、蜂小六殿、前将殿御前に罷り出で候ところ、様なくこの場に木藤殿（羽柴秀吉）不在に付き、互いに顔見合せ言葉を知らずなり。さながら鷹に見据えられた小鳩の如し。この夜の信長様差し迫りたる様子更に無し。喜左衛門後日話に候。上総介様おどりに興じられ、見兼果て生駒八右衛門腰を折り恐れながら申し上げけるは。築地際に扣え神妙なるは、兼てより殿御見知り置ききの無足の者共、急度三州表の動き注進に及び候なり。暫時の間御手をやすめられ御拝謁あつてしかるべきと、切願候ところ。無粋なる哉八右衛門、折角の興に入るところ半ば興さめたるはとて、御側にはべりし市橋伝左衛門を召し寄せなされ、しからば茶など一服頼もうぞ用意候えと、真直ぐに書院へ向われけるなり。八右衛門尉、兩人最前より手持ち無沙汰にて築地に扣え候を呼び寄せ、今宵の殿は、御機嫌斜めなり。よくよく言い含め、兩人を伴い御書院庭先へ案内仕るところ、矢庭に大音を発せられ、不粋なる奴ども夜中の推参は何用ある哉。前のおどり馴げ振りと一変、眼光鷹の如く兩人を見据え、御威光限り無く厳しき御面体に候なり。蜂須賀彦

右衛門、前将右衛門ひるまず三州表の様子遂一言上候由。先日佐脇藤左衛門殿をもつて御召し出の儀。これにより、おどり御興中夜中の推参、殿の御興を損じ非礼の段何者にも替え難し。さりながら某ども野にある普段格別の御恩願聚り、御家の危急の出来、御不興を顧みず駆け付け候なり。されば、三州一円すでに治部少輔（今川義元）へ加担。松平党御敵に相成るは真相に候。国を挙げて合戦の用意に余念なく、斯月を待たず治部少輔の西上違い間敷候。すでに海道筋は兵糧を所所に野積み、馬飼料うず高く、国隈関々嚴重に取り固め、岡崎表へ今川衆多太多太出張り、諸事申し付け慌しく、府中より掛川、浜松、海道筋同然に候。この分にては、治部少輔府中を発向候わば、五、三日を経ずして尾張堺へ乱入は必定。されば堺目御味方の齋津、丸根の諸城は大勝の前の孤舟も同然。捨て殺し候や。急度身統の人数遣わされ、城堅固に取り固め備え肝要と存ずる次第。色を替えずに言上候由に候なり。弓箭の家の替れをもつてこのままに打ち過ぎ候哉、御家の面目更に無し。日頃の御恩に報ゆるべく、直ちに我等川筋の者糾合蒐集め候わば、その数二千は下る間敷候。寸時を惜しむ刻に候。御用命あつてしかるべきと切々懇願候次第。



卷二の三十一「蜂須賀党尾三の境目細作仰せ付けらる事」の第二

当日郡村生駒屋敷おどり張行御触あるにより、参会の者の覚えこれあり。喜左衛門（前野義康）話。上総介様、いとも陽氣に出で立ち、剽氣おどりなされ候由。大事の出来、聊かも御氣にかけられ候様体にてはこれ無く。夜を通し東方しらむ頃合までおどり興じ候。参会の者の覚え、某ども一党は挙げて賑々敷おどり申し候。蜂須賀党の者、御舎弟小十郎殿、大八殿、稲田大炊介、郎党相加え二十有余人。川筋衆、坪内惣兵衛（為定）、前野又五郎（忠勝）、同喜太郎（坪内利定）。我等一党の者、前野将右衛門（長康）、御舎弟小兵衛殿（前野勝長）、村瀬亀、同作左衛門、前野長兵衛尉（義高）等三十有余人同然なり。柏井衆は参らず候由。すでに佐佐準人殿（政次）、内蔵介殿（成政）、祖父孫九郎尉（小坂雄吉）、竜泉寺に構え候由。森小助、甚之丞（森正成）は清須に罷り候ため参らず。曾祖父小次郎尉（前野宗康）は、病差し置き河内に罷り候小兵衛尉（前野勝長）を在所へ返し候。病に平臥無念の至り、危急の折、よくよく言い合め長兵衛尉（前野義高）同道仕り御礼申し宜べ候。曾祖父小次郎尉宗康儀、同年相果て候なり。某

（小坂雄吉）は九歳、喜左衛門同道郡村へ罷り候事、うろ覚えに候も、大層なる御張行、賑々敷篝火天空を焦がし、在郷地下人上下構わずのおどり講中に候なり。

## 五 桶狭間の戦い

第一冊二六六ページから二七〇ページにかけての、桶狭間の奇襲の直前の様子も、「武功夜話」を利用して生き生きとしている。

卷二の三十五「田業はさま蜂須賀党働きの事」の第一ここに尾張、三河の境目、川筋の諸邑□（欠落）生、諸和傍示本、祐福寺の諸村は、蜂須賀党の者昵懇の人々多これあり。治部少輔（今川義元）、国の境目に隙入り、織田の出城鷲津、丸根の諸取出を取り抱うるに手間入らずの賣口、利に賢しき長百姓始め、僧侶、併せ神主の輩ども語合い、幸先よき御陣に候なり。治部少輔様の御機嫌損い候や、後日難儀相懸りては宜しからずとて、村長先頭に指図いたし、御酒樽、勝栗、昆布等御肴の用意に余念無く候処へ、蜂須賀党の面々、村長藤左衛門兼てより昵懇の間柄に候ゆえ、百姓になりすまし、海道へ罷り出で今川治部少輔の御

興の通過を相待ちける。大将蜂須賀小六殿に相隨うは、前野將右衛門（長康）、蜂須賀小一郎、村瀬兵右衛門、同於亀、武藤九十郎、小木曾平八、稲田大炊介（植元）、前野右京進等の究竟なる者共凡そ十八人打ち揃え大道へ衆人に紛れ差し出で候由に候なり。

卷二の三十五「田楽はさま蜂須賀働きの事」の第二蜂須賀兼てより用意仕る献立の品々の覚え。

- 一、勝栗 壹斗
- 一、御酒 拾樽
- 一、昆布 五拾連
- 一、米餅 壹斗分、これは糠米にて
- 一、粟餅 壹石分
- 一、唐芋 煮付け候、拾椀
- 一、天干大根 煮〆五椀分

已上

大道へ献上の品々運び入れ、白布を敷いて並べ置き、御大將治部少輔様の御通過を、村長藤左衛門始め一同土下座致し相待ちけるに、数日來の暑氣厳しく、この辺り木立ちも絶えて無く、中天に陽は輝き待ち居る一同流汗甚敷、四辺草木縮みて眼も眩む如くに候。午の上刻と覺しき頃合い、

下手より十數騎の武者砂煙りを揚げて駆け來たるなり。矢庭に馬上より声高に、御屋形様の御通りぞ目ざわりに候。直ちにこの場を退散候え、しからずんば不遜の者これあり候わば、この場において切り捨てん、退散退散と呼ぱり呼ぱり駆け廻し候なり。村長藤左衛門馬前に進み出で、恐れ乍ら某ども不遜の心得微塵もこれ無く候なり。御館様の御勝利、某ども百姓ども御徳に預り恐悅至極に候。されば長途の御軍旅御慰め申し度く御見舞に罷り出でたる次第。何分には百姓御憐愍伏して御願ひ奉り、御屋形様御取り次ぎ言上候えと申しけるなり。何卒御聞分け下されと一同平伏、頭を地にすりつけんばかりに哀願候ところ。件の武者の内、名のある者と覺しき者、殊勝なる心得、さまざま相無き様道脇にて扣え候えと、馬首を返して駆け去り候。衆中に入りし蜂須賀党の面々、成り行き案じて大事の折柄色を失い、刻の移り長々たらしく覺え候と後物語りあり。今川衆、用心深き事に候。程なく今川治部少輔の御興この地を通過、先達の武者馬を止めて申しけるに、汝等殊勝なり、心得御屋形様に言上候ところ、至極御清悦に候なり。能承れと、治部少輔様の御言葉伝えけるに。此度の御屋形様の御出馬は、織田の小作一人討ち取り退治に兵を進めたるにはあら

ずなり。これに従い京に上り乱国を平定諸將に号令、御帝の神慮をやすせんがためなり。しからば、当国織田上総介信長儀、余に服せざるゆえこれを退治致すに手聞入らずなり。尾張国中平均の上は、惣じて土民、百姓に安堵せしむべく徳政を施さん。能々心得て候えと申されけるとぞ。

## 六 「武功夜話」利用の意味

例示は省略するが、「下天は夢か」が「武功夜話」の記事を利用した箇所はこの他にもある。若き日の信長を描くにあたり、資料の少ない中、「武功夜話」という書物は、津本陽にとつて重要な意味を持つものであった。説者が「下天は夢か」を読んで新鮮な感動を覚え、「新しい信長像を描いた」（注6）と感じるのは、ひとえに「武功夜話」という新出の資料に負うところ大なのである。

考証過程で、一つの疑義を抱いたので報告しておく。「下天は夢か」の新聞連載は、昭和六十一年（一九八六）十二月一日から始まっている。ところが、「武功夜話」第一巻の発行は、昭和六十二年（一九八七）二月十日である。さらに、一番最初に掲げた例、「下天は夢か」が「南窓庵記」を引用している部

分は、昭和六十二年一月四日・五日掲載分なのである。

窮余の一策、「武功夜話」の翻刻紹介者、吉田蒼生雄氏に問い合わせたところ、次のような回答を得た。

「武功夜話」を解説している時、正確には、第一巻の原稿を、出版社の大出俊幸編集長に渡し、活字組が出来て、ゲラ刷りが出来上がったのを、津本先生が待つてみえて、持つて行き小説が新聞連載として初まりました。

これによって疑問は氷解し、先の考証の有効性が保証された。「下天は夢か」は「武功夜話」の出版を待ちかねてそのゲラを読みつつ書き出されたものであり、「下天は夢か」の新鮮さ・画期性は「武功夜話」のそれによるところがはなはだ大きいのである。「下天は夢か」ヒット（注7）の要因はいくつか挙げられようが、その最大のものは「武功夜話」の逸早い利用によるものと考ええる。

両書を読んだ者にとつて、その関係は容易に理解されるのであるが、先のような時間の問題もあり、津本氏はもとより両者の関係を明言した記事が管見に入っていないので、敢えて駄文を草した次第である。見ず知らずの私の質問に懇切丁寧にお答えくださった、吉田蒼生雄氏に心からお礼を申し上げます。

注

- 1 「プレジデント」一九九〇年九月号所載鼎談における津本陽発言。(同書五十二ページ)
- 2 愛知県江南市前野の旧家、前野家の所蔵文書の一。昭和六十二年二月から昭和六十三年三月にかけて、吉田蒼生雄氏の手によって翻刻出版された。(新人物往来社刊)
- 3 「読売新聞」に昭和六十三年一月二十六日から平成元年二月二十七日にかけて連載。単行本は平成元年七月十七日、上下二冊同時発行。(講談社刊)
- 4 「プレジデント」一九九〇年九月号所載鼎談における会田雄次発言。(同書五十三ページ)
- 5 注4に同じ。
- 6 「プレジデント」一九九〇年九月号所載鼎談における津本陽発言。(同書五十二ページ)
- 7 「プレジデント」一九九〇年九月号所載鼎談における津本陽発言によれば、百三十万部の売上げに達したという。(同書五十二ページ)

(本学助教授)